第18回(平成21年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業

ຂອບໃຈ ບ້ານ ນາຊອນ

(ありがとう ナーソン村)

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
財団法人 鹿児島県国際交流協会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業
実行委員会　会長
弓　場　秋　信
（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会　事務局長）

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成２年度にマレーシアに派遣以来18回を迎えた。青少年を開発途上国に派遣し「国づくり、人づくりに貢献している」青年海外協力隊員の活動現場訪問で国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイでの異文化体験や学校等での交流を通じて国際性豊かな青少年を育成することを目的に、青年海外協力隊鹿児島県ＯＢ会、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、財団法人鹿児島県国際交流協会の３者で構成された実行委員会で実施しています。これまでに、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオスの５ヶ国に県下一円から今回の14名を含む207名の中高生を派遣しました。

昭和40年に発足した青年海外協力隊最初の派遣国で、現在鹿児島県出身者２名を含む34名が活動中のラオスに昨年に引き続き今年も派遣しました。インドシナ半島の中心部、大河メコン流域に位置し５カ国と国境を接するラオスは、1899年フランスの植民地となりラオス王国として独立したのが1963年。独立後も王国派と左派（パテトラオ派）との内戦やベトナム戦争の影響で政治的混乱が続いた後、1975年ラオス人民民主共和国が誕生しました。日本の本州とほぼ同じ国土に人口約580万人、多数派の低地ラオ族を含む49の民族からなる多民族国家です。

鹿児島市・鹿屋市・南九州市・南さつま市・枕崎市・いちき串木野市推薦の10名と企業の協賛を得ての実行委員会推薦４名は、２回の事前研修でラオス語、ラオス事情、青年海外協力隊等の国際協力、日本・鹿児島について学び、期待に胸を膨らまし平成21年７月19日、７泊８日の日程でラオスに向け出発しました。

団員は、国際協力機構JICAラオス事務所を訪問し、ラオス事情、国際協力について学び、ビエンチャン県ナーソン村での４泊のホームステイに臨みました。言葉・生活環境・文化・価値観が異なる村での生活、小学校での日本舞踊・歌、習字、折り紙などの日本文化紹介。そして水質検査、保健師、助産師として活動する青年海外協力隊員の活動現場訪問。毎日が新鮮な出会い・気付きの連続で自分を見つめる時間。団員一人一人の体験を通しての感想が綴られた報告書「コプチャイ　バンナーソン（ありがとうナーソン村）」が中高生をはじめ多くの皆様の心に届くことを希望しここにお届け致します。

終わりに本事業実施に当たりご支援ご協力を頂いた共催市、協賛企業、国際協力機構JICA九州、JICAラオス事務所、ナーソン村、活動中青年海外協力隊員を初めとする多くの関係者に心より感謝申し上げます。今後とも本事業へのご支援を賜ります様お願い申し上げます。

もくじ

はじめに
鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会　会長　弓　場　秋　信
ごあいさつ …… 1
鹿児島県商工労働部観光交流局長　椿　　哲　哉
第18回（平成21年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要 …… 2
参加団員等名簿 …… 3
スケジュール …… 4
地図 …… 5
体験事業ドキュメント …… 6
～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～
団員が感じたこと …… 14
「ラオスでみつけたもの」　松　村　祥　子
「ちっぽけな世界の向こうに」　吉　永　真　愛
「夢と出会い」　藤　﨑　絢　未
「ラオスに行った私」　丸　久　千　裕
「ラオスに行って」　田　中　美　久
「ラオスから学んだこと」　鶴　丸　千　草
「ラオスでの僕」　宇　都　真太郎
「私が見たラオス」　外　薗　詩　織
「ラオスと日本」　有　木　広　秋
「ラオスでの出来事」　下　竹　輝　希
「ラオスは赤」　田　畑　侑　紀
「ラオスで得たもの」　崎　迫　愛　香
「不自由なき生活の私」　内　山　祐　紀
「素晴らしいラオスとの出会い」　永　田　愛　夏

団長報告 …… 28
「若き薩摩の14人　ラオス同行記　'09」
肥　後　憲　郎　((財)鹿児島県国際交流協会　事務局長)
同行者感想 …… 29
「ラオスでのすばらしい日々」　林　田　　学
「変化と成長」　段　原　美　幸
「ラオス体験事業同行日記」　柳　元　理　恵
新聞記事（南日本新聞，西日本新聞） …… 32
参考資料
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要 …… 35
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績 …… 36

ごあいさつ

鹿児島県商工労働部観光交流局長
椿　　哲　哉

平成21年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は，鹿児島の青少年を開発途上国へ派遣し，それらの国の経済的・社会的発展に貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や，現地で協力活動を行うことで国際協力に対する理解を深めるとともに，現地の人々との交流を通じて相互理解を深め，国際性豊かな人材を育成することを目的とした画期的な事業です。

成長著しいアジアの時代到来を見据え，同地域の環境，経済，多様な文化などに精通した人材を育成するため，県でも様々な施策を積極的に推進しております。現代の国際社会を取り巻く諸問題を解決していくためには，一人ひとりが自らの国や地域について見つめ直すとともに，異なる文化・習慣・考え方などについて理解を深める姿勢が重要になってまいりますが，この点でも本事業は非常に意義深い事業であると考えます。

今回の体験事業では，団員の皆さんは８日間の日程でラオスを訪問し，青年海外協力隊員が試行錯誤を繰り返しながら協力活動を行っている姿を目にし，また，ホームステイや地元小学生との交流等で現地の方々との心のふれあいを体験したことで，国際協力や相互理解の必要性，重要性を痛感されたのではないかと思います。

この貴重な体験で得た感動をこれからの糧として心に深く刻み，自分たちには何ができるかを考え，是非身近なところから取り組んでいただき，将来，鹿児島を代表し，世界に通用するたくましい若者に成長されることを心から期待しております。

最後に，この事業を主催された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会を構成する各団体及び実施に当たり御支援・御協力をいただきました国際協力機構並びに青年海外協力隊の皆様に心から感謝を申し上げますとともに，関係者の皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

第18回（平成21年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

1　主催　　鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

※　構成団体　　鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県ＯＢ会

㈶鹿児島県国際交流協会

2　共催　　鹿児島市，鹿屋市国際交流協会，いちき串木野市国際交流協会，南九州市教育委員会，南さつま国際交流推進協議会，枕崎市教育委員会

3　後援　　鹿児島県

鹿児島県教育委員会

独立行政法人国際協力機構　九州国際センター

4　協賛　　㈱鹿児島銀行

鹿児島空港ビルディング㈱

鹿児島トヨタ自動車㈱

小正醸造㈱

薩摩酒造㈱

㈱下堂園

南国殖産㈱

㈱山形屋

弓場貿易㈱

地球市民教育ネットワーク鹿児島

5　事業の流れ

４月～５月	募集・団員決定
６月13日（土）	第１回事前研修
７月４日（土）～５日（日）	第２回事前研修
７月19日（日）	出発
７月26日（日）	帰国
８月４日（火）	表敬訪問
８月22日（土）	報告会
９～10月	報告書作成

参加団員等名簿

■団　員

	名　前	性別	学　　校	学年	推薦市長等
1	松村祥子（まつむらしょうこ）	女	学校法人鹿児島純心女子学園 鹿児島純心女子高等学校	1	鹿児島市
2	吉永真愛（よしながまい）	女	鹿児島県立　鶴丸高等学校	2	鹿児島市
3	藤崎絢未（ふじさきあやみ）	女	鹿児島市立　鹿児島玉龍中学校	3	鹿児島市
4	丸久千裕（まるひさちひろ）	女	鹿児島県立　開陽高等学校	3	いちき串木野市
5	田中美久（たなかみく）	女	学校法人前田学園　鹿屋中央高等学校	1	鹿屋市
6	鶴丸千草（つるまるちぐさ）	女	鹿屋市立　高隈中学校	1	鹿屋市
7	宇都真太郎（うとしんたろう）	男	鹿児島県立　薩南工業高等学校	1	南九州市
8	外薗詩織（ほかそのしおり）	女	学校法人希望が丘学園　鳳凰高等学校	1	南九州市
9	有木広秋（ありきひろあき）	男	学校法人希望が丘学園　鳳凰高等学校	1	南さつま市
10	下竹輝希（しもたけてるき）	男	枕崎市立　枕崎中学校	2	枕崎市
11	田畑侑紀（たばたゆうき）	女	鹿児島県立　松陽高等学校	2	指宿市
12	崎迫愛香（さきさこあいか）	女	長島町立　川床中学校	3	長島町
13	内山祐紀（うちやまゆうき）	女	鹿児島県立　市来農芸高等学校	2	薩摩川内市
14	永田愛夏（ながたあいか）	女	薩摩川内市立　樋脇中学校	1	薩摩川内市

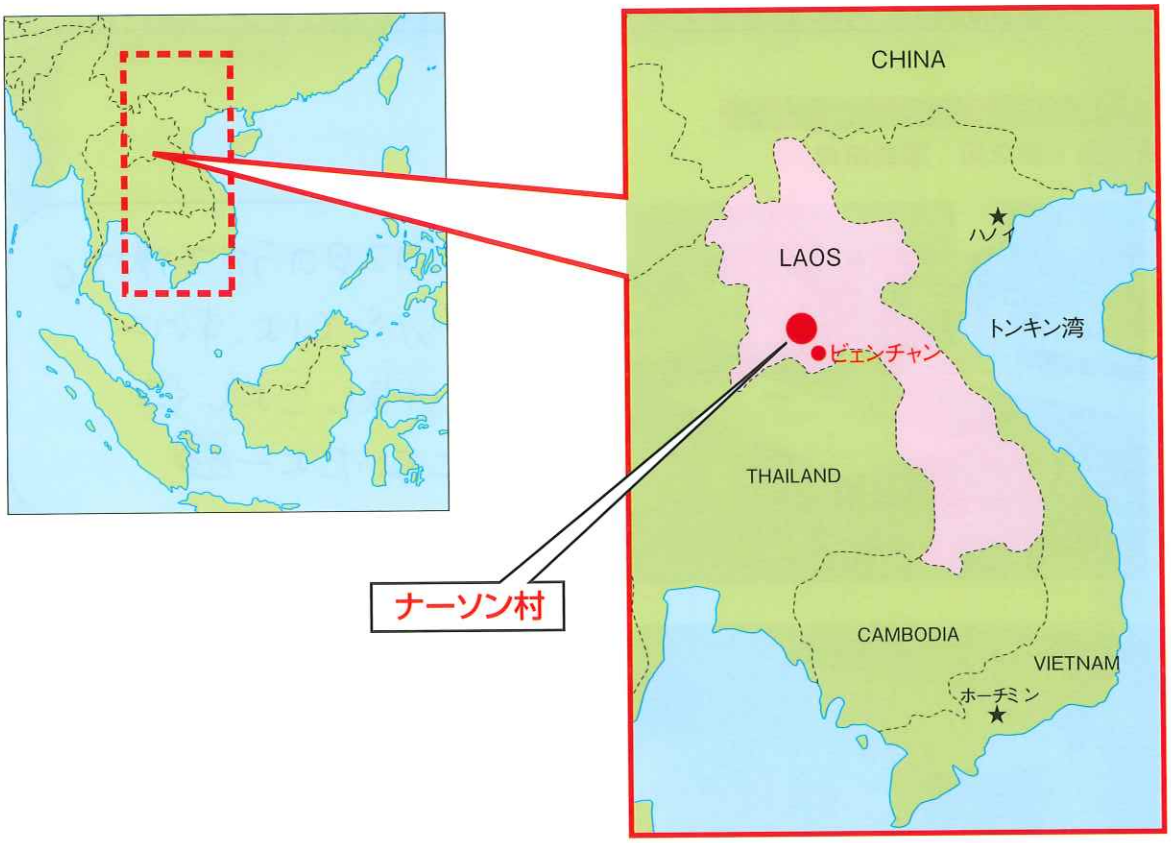
■同行者

	名　前	性別	所　　属	担　当
1	肥後憲郎（ひごのりお）	男	財団法人鹿児島県国際交流協会　事務局長	団　長
2	林田学（はやしだがく）	男	青年海外協力隊ラオス OV（稲作）	調　整
3	段原美幸（だんばらみゆき）	女	財団法人鹿児島県国際交流協会 交流推進員	調　整
4	柳元理恵（やなぎもとりえ）	女	青年海外協力隊ドミニカ共和国 OV（看護師）	健康管理

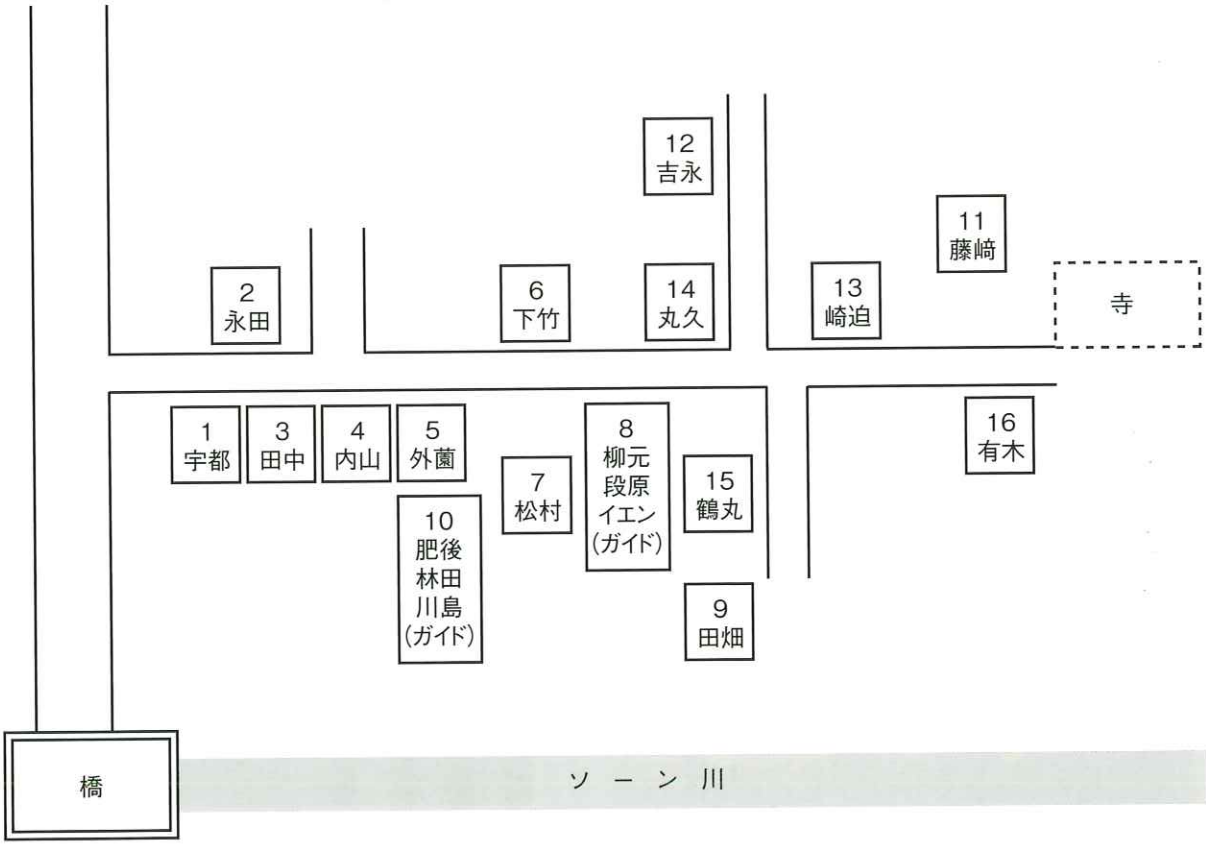
スケジュール

日	曜	地名	時刻	交通機関	内容	宿泊
7月19日	日	鹿児島発 福岡経由 バンコク経由 ビエンチャン着	7:50 8:35 着 11:45 発 15:05 着 19:50 発 21:00 着	飛行機 バス	集合・チェックイン 結団式 ・空港→ホテルへ	ホテル
20日	月	ビエンチャン ナーソン村	9:30 10:00 午後	バス	● JICA ラオス事務所　表敬 ・ビエンチャン市→ホームステイ先	ホームステイ
21日	火	ナーソン村	終日		●終日ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
22日	水	ビエンチャン ナーソン村	8:00 9:00 14:00	バス	・隊員活動現場へ移動 ●青年海外協力隊　活動視察 チャナイモ浄水場 水質検査　鵜飼智弘隊員 ●青年海外協力隊　活動視察 国立母子保健病院 看護師　成田祥子隊員	ホームステイ
23日	木	ナーソン村	9:00 夜		●現地子ども達との交流 ●お別れパーティー	ホームステイ
24日	金	ナーソン村 ビエンチャン	9:30 10:30 13:00 18:30	バス	・ホームステイ先→ビエンチャン市 ●青年海外協力隊　活動視察 サイセッター郡病院 助産師　北村愛隊員 バンデゥンヘルスセンター 助産師　北村愛隊員 ● JICA 関係者との懇談会	ホテル
25日	土	ビエンチャン ビエンチャン発 バンコク着	終日 21:45 発 22:50 着	バス 飛行機	●市内観光，買い物 →空港へ移動	機内泊
26日	日	バンコク発 福岡着 鹿児島着	0:50 発 8:00 着 14:00 着	飛行機 バス	解団式	

地　図



ナーソン村　ホームステイ先



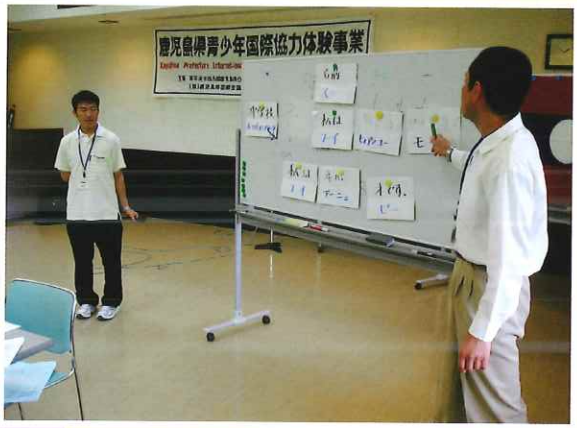
体験事業ドキュメント

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

6月13日（土），7月4・5日（土・日）

第１回・第２回　事前研修

１泊２日のラオス漬け。
メンバーとは、すぐに
仲良しこよし☆
になったよー



7月19日（日）

結団式・出発

まずは、バンコクまで…
長時間のフライト!! 楽しみー♪
はりきってw
いってきまーす!!♡♡

乗り換え地・バンコクで

ビエンチャンに到着

いよいよ
LAOSに飛びまーす

7月20日（月）

ビエンチャンの朝

JICAラオス事務所　表敬

ナーソン村　ホストファミリーと対面

うまく
しゃべれるかな？
メー（お母さん）
5日間よろしく
お願いします

7月21日（火）

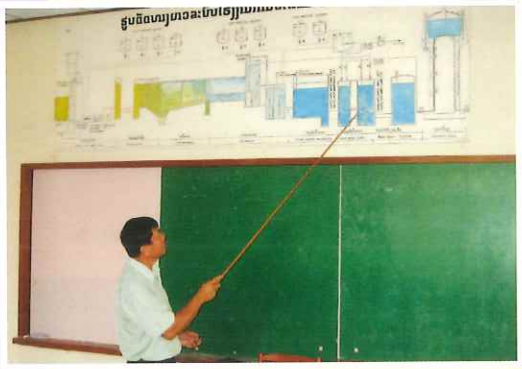
村での1日

今日は終日ホストファミリーと
過ごす日！(^0^)/
皆、それぞれのホストファミリーと
楽しい時間をすごしました。
今日1日でホストファミリーとは
本当の家族みたいに
仲良しになった♡♡

7月22日（水）

青年海外協力隊活動視察

鵜飼智弘隊員（水質検査）



鵜飼隊員がしっかり私たちに分かりやすく説明してくれました。
日本の技術をたくさん取りいれていてシステムはあまり変わらないそうです。
メコン川の色にんびっくり！

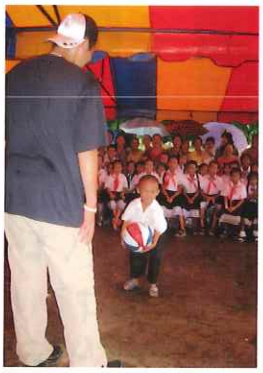
成田祥子隊員（看護師）

実際に生まれたばかりの赤ちゃんに会うことができた。
皆たくさん質問した!!

7月23日（木）

子ども達との交流会

あやみの日舞に、
ラオスの子供達、興味津々
すごくキレイだった



名前をカタカナで書く書道コーナーは大人気!! ほかにも、折り紙、写真、イラストのコーナーをつくって交流した。

お別れパーティー

バーシーの儀式。
村の人々が心をこめて手に糸をまいてくれた。
女性は皆、「シン」を着た

7月24日（金）

ホストファミリーとの別れの朝

ついにお別れの朝。
4泊5日 すごく早かった。
別れるなんて
さみしいよー

青年海外協力隊活動視察
北村愛隊員（助産師）

最後の活動視察は、
鹿児島県出身の北村隊員の
現場。一緒にヘルスセン
ターにも行った。
かっこよかったあ♡!!

7月25日（土）

ビエンチャン市内観光

市内観光
ブッダパークはおもしろい
仏像がいーっぱい!!
お買い物もたくさんした。
ラオスは物価が
安くてたくさんかって
しまったー

ラオス出発

空港には村の人々が来てくれた。涙がとまらなかった。
絶対また、皆でラオスに帰ろうね!!

7月26日（日）

解団式

ただいまー☺

さっきまでラオスに
いたのに…

楽しい時間は過ぎる
のがあっというまだ。

1週間 本当にいい
経験ができました。

8月4日（火）

表敬訪問

8月22日（土）

帰国報告会

多くの人にラオスで
1人1人感じたことや体験し
たことを聞いてもらいました。

少しだけ
きんちょうした〜 ㅋㅋ

ラオスでみつけたもの

鹿児島純心女子高等学校　1年　松村　祥子

7月19日から26日までの8日間14人の団員と4名の引率者と一緒にラオスに行きました。はじめてのラオス。文化も言葉も日本と全く違います。そして，日本に比べるとまだまだ発展途上の国です。「海外に行ける」という楽しみな気持ちもありましたが，研修を重ねるにつれ，うまく話せるかな。辛いもの食べれるかな。トイレやお風呂大丈夫かな。という不安のほうが大きくなっていきました。しかし，帰国して考えてみると，私のラオス生活はとても充実していて，あっという間の8日間で一生忘れることのできない思い出になりました。8日間の生活の中で一番心に残っていることは，4泊5日のホームステイです。私の家族は，メー（お母さん），同い年の男の子ティー，11才の女の子ルムの3人家族でした。3人は，ホームステイ初日から全く知らない外国人の私にとても親切に接してくれました。

言葉がわからなくて，会話帳で単語を探しているときは，どんなに時間がかかってもずっと隣で待っていてくれました。また私に分かりやすく，大きくジェスチャーを使って話をしてくれました。ホームステイ中，特に驚いたことは，ラオ人の近所との付き合いかたです。夜，メーに腕をひかれて行った場所は，近所の家でした。勝手に人の家に入って，その家の晩ご飯や果物を勝手に食べはじめます。日本では見たことのない光景で，驚いたと同時に，ラオ人の心は，とてもゆたかだと感動しました。楽しい時間は，過ぎてしまうのがとても早くて，4泊のホームステイはすぐに終わってしまいました。私たちが日本へ帰る日の夜は，

本人：前列右

本人：中央

ナーソーン村のホストファミリーが皆，ビエンチャン空港に見送りに来てくれました。我慢していた涙も，最後だと思うと溢れてしまいました。ナーソーン村の人々に出会え，3人の家族にも出会えて，私は本当に幸せだと思いました。このラオスでの生活で私が学んだことは2つあります。1つ目は，英語は世界共通語ではないということです。確かに，現在世界中で1番話されている言葉は英語で，外国人と会話をするときには，英語を話します。けれど，世界には，英語を勉強しない人やできない人もいます。私もラオスで困ったときは，英語を話そうと思っていたけれど，家族に英語は通じず話すことはできませんでした。でも，英語のかわりにジェスチャーを使うと，よく伝わりました。体を使って言いたいことを表現するジェスチャーが，1番の世界共通語ではないかと思いました。相手に自分の意思を伝えたいと思うことが大切なんだと学びました。2つ目は，「ゆたかさ」についてです。私もラオ人のように心のゆたかな人間になりたいと思いました。人の不幸を望まず幸せを望むこと。これは村人から，「健康でいられますように。」とバーシーの儀式でつけてもらった糸を見て，強く感じたことです。どんな人に対しても，平等に優しく接することのできる人間になろうと思います。

最後になりましたが，私がラオスへ行くことができたのも，鹿児島市や県庁，その他たくさんの協力をしてもらった企業の皆様，そして私がラオスに行くことを心から応援してくれた，家族と学校の先生方，友達に深く感謝しています。ありがとうございました。

ちっぽけな世界の向こうに

鶴丸高等学校　2年　吉永　真愛

ラオスは最高だった。確かにものすごく暑かったし，食べ物だってとても違和感があったけれど，ラオスはそんなことを感じさせないほどの魅力でいっぱいだった。ラオスの人々は素晴らしかった。あんなに優しくて，明るくて一緒にいて楽しい人々は世界中探してもどこにもいないのではないかと思う。ラオスの人々は私達に持っていないものをたくさん持っていた。物が豊かになるほどに忘れられ失なわれつつあるものの本当の価値が分かったような気がした。世界中の人々がラオス人だったら，戦争なんて起こるわけがないのにな。本気で何度もそう思った。

ラオスは自分を客観的に改めて見つめさせてくれるという素晴らしい時間を私達に与えてくれた。この時間こそが次の自分への大きな一歩を踏み出すための大きな糧となるだろう。高校生活はストレス社会だと思っていた。高校に入ってからよく体調をくずすようになったし，本当に忙しいので自分のことで精一杯で，困っている人がいても，なかなか構ってあげられなくなっていたことを自分でも薄々感じていた。もちろん頑張ればその分だけ自分を成長させてくれる。勉強も部活も行事でも，みんな一生懸命頑張ってお互い切磋琢磨し合って成長できる，そんな場所でもある。このように色々な事を自分と向き合って考えられるようになったのも，やはり私も大人に近づいてきているからなのだろう。高校ではあまり人前で感情を出すこともなくなった。自分のなりたくない私に近づきつつあった。自分の大好きなものは分かっている。でもそれを押しかくして表面は冷静さでかためてしまっていた。私はいっぱいいっぱいだった。

ラオスはそんな私をいやしてくれた。道路のない道，遠くて大きい空，朝は鶏の大合唱で飛び起き，大音量の音楽と朝食。そんな自由な生活と初めての感動で私の心はたくさん呼吸することができた。そして今まで隠していた大好きな自分で一週間過ごすことができた。笑顔，明るさ，陽気さ。そういったものが小さい頃から大好きだったのに成長するにつれて，周りの人に合わせるために本当に自分に価値のあるものを隠して，自分が嫌いなもので作っていた本当にちっぽけな世界をラオスは人間にとって価値があるもの，本当に必要なものでいっぱいにしてくれた。人の視線なんかどうでもいい，自分らしく生きることがどんなに楽しくて素晴らしいことだろう，ラオスは私がどんなに数学をしようと，英語をしても分からないことを一週間かけてゆっくりゆっくり教えてくれた。私にとってかけがえのない宝物となった。人は急に変われないものだから今すぐには難しいかもしれないが，これからどんなことがあっても自分らしく生きていける，ラオスの人達のような素敵な人になりたい。そう思った。

夢と出会い

玉龍中学校　3年　藤﨑　絢未

2009年夏。わたしは，鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加してラオスへ行きました。今までは名前も知らなかった国でわたしは，人生を大きく変える体験をしました。

ラオスには，日本からたくさんの青年海外協力隊員やJICA職員が派遣されています。今回，わたしは，隊員の活動の視察をして多くのことを学びました。

青年海外協力隊の方々は，自分の仕事を心から誇りに思っていて，とても生き生きしていました。異国の地で言葉や，考え方，常識の違いなど，たくさんの苦難困難に見舞われながらも，隊員の方は，ラオスのために頑張っていました。そうやって自分のためや，自国のためだけではなく，世界に目を向けた活動が出来ることは，素晴らしいことだと思います。

わたしは，隊員の話や，活動を見ているうちに青年海外協力隊の仕事にとても興味を持ちました。そして，いつか自分も青年海外協力隊員になって，世界のために働きたいと思いました。今までは，ただ漠然だった自分の未来像が，隊員となって働くという，輝く夢へと変りました。そのためには，絶え間ない努力が必要だと思いますが，今回，お世話になった協力隊の方々の姿を思い出し，絶対に叶えてみせるという強い気持ちを持って，頑張っていきたいです。

わたしは，ラオスで，もう一つ素晴らしい出会いがありました。それは，ホストファミリーとの出会いです。初めは，全く知らない人の家で４日間も生活するなんて……と不安でいっぱいでした。しかし，彼らは，わたしに本当の家族のように接してくれました。ラオスの人は，とても心が温かくて，優しい人たちばかりでした。村が一つの家族のように仲が良く，近所付き合いの深さには驚きました。

ホストファミリーはわたしとコミュニケーションをとるために，絵を描いてくれたり，ドライブに連れていってくれたり，たくさんの話をしてくれました。親せき一同が集まって宴会をしたり，とても楽しい時間を過ごしました。４日間なんて，あっという間でした。だけど，その４日間は，わたしの日常とは違い，大切な大切な思い出です。きっと一生忘れないことでしょう。

最後の夜に，ホストシスターが言ってくれた，

「絢未は，わたしの家族だから，いつでもこの家に戻っておいで。離れていても，ずっと想っているから。」

という言葉は，本当に嬉しかったです。ご飯を食べるときも，テレビを見るときも，寝るときも，ずっと一緒だった彼女は，実の姉のような存在でした。いつか，もう一度，ラオスへ行って，もう一つの家族に会いに行きたいです。

わたしは，ラオスで，たくさんのことを体験し，たくさんのことを学びました。そして，かけがえのない思い出ができました。

夢を見つけ，ラオスの人の心の温かさに触れたこの旅。わたしは，ラオスでの体験を，自分の人生の糧として生きていきたいです。

本人：後列左から２番目

ラオスに行った私

開陽高等学校　3年　丸久　千裕

過ぎ去りし日は懐かしく，今年の夏の思い出は一生の宝物となり，将来への糧となった。

ラオスでの日々，初めての私はどこか他人事で感触のない空の上を歩いているようなふわふわした気持ちで飛行機へと乗った。初めての海外，ホームステイは前知識が無いだけに怖いもの知らずだったのだ。そして私は訪れた。

最初に感じたラオスは日本より強い蒸し暑さと異国のかおりだった。初日のラオスは夜の真っ只中で空に光る星々は名前は分からないけれど，とても綺麗で輝いていた。

話し始めれば限りのない道中だったがホームステイの日々を語りたい。

私のラオスでの家族は父母と17才の娘という家族構成の公務員の一家だった。初めて対面したのはナーソーン村のお寺の前，ローマ字で書かれた私の名前の紙をポーが持っていた。ちなみにポーとはラオス語で父という意味，メーは母という意味だ。私はこのポーメーにとてもお世話になった。ポーは笑いながら私を探し出し，挨拶を交わした。スーツケースをもってくれ，でこぼこした道を言葉は分からないが笑顔で歩いた。そう，娘のタイは私より一つ下だったがとても働き者で，言葉の壁を乗り越え友達になった。こうして最初の対面を済ました私達だった。ラオスでの家族と過ごした日々だが，楽しくて笑顔だったという記憶しかない。朝起きてサバイディーと両手を合わせて挨拶をし，指さし会話帳で会話する，もちろん単語だからくわしい話や本当にこれであっているのか？など良く分からない部分もあったが，日本で暮らしていた日々より笑っていた。タイは高校に行っていないらしく英語は出来なかったが私もにたようなものだし眠たい時や疲れた時は寝る仕種をしてホーンと言ったり，おなかがいっぱいの時は腹をさする仕種をすれば日本語も通じた。分からない時は言葉をくり返したり，通訳さんや日本語の分かる人に訳してもらったりした。

そうそう，一番驚いた事がある。洗面所に棚がなく，着替えは棒に引っ掛けるという事だ。確かに下はコンクリートだし水が流れるから置きようがないのだが，これが一番カルチャーショックだったし，脳内革命だった。ちゃんと引っ掛けとかないと下の桶に落ちてしまう心配もあったのだが，日本にない考え方だな，と思い異国にいるのだと感じたのだった。もう一つ驚いた事は，家族でない人が家に出入りしている事だった。最初は，家族かな？と思っていたのだが，どうやら近所の人らしい。いつの間にか集まって，親しく会話をし，いつの間にか去っていく。ホームステイ後半には，御向かいの子供に夜，日本語をレクチャーする仲にまでなってしまった。

日本では有り得ない近所付合いの良さに感慨深さを感じた。

そしてお別れの時，タイとメーが送り出してくれたが，お別れが終わった後の方が別れが身に沁みた。

空港ではポーが見送りに来てくれた。そこで，本当に最後のお別れ。

目を赤くして別れ，また戻ってきたいと心に決める。

この旅で私は少し変ったと思う。具体的に言えば，視野が広くなったし語学を学びたいという気持ちが芽生えた。

今度，またラオスの地を踏む時はラオス語で自分の事を伝えられる様に，そしてポーメーとタイの話を理解できる様になりたいと思っている。

本人：左から２番目

本人：中央

ラオスに行って

鹿屋中央高等学校　1年　田中　美久

今回この事業に参加して，とても良い経験が出来ました。私が興味を持っていた，青年海外協力隊の活動の視察や，初めてのホームステイなど，とても楽しい時間を過ごせました。私がラオスに行って，一番最初に感じた事は，とても優しい人ばかりだと言う事です。

７月20日から４日間のホームステイが始まりました。最初はとても不安で上手くコミュニケーションがとれるか心配でした。でも，そんな私に，積極的に声をかけてくれて，少しずつ会話が増えました。すると，指さし会話帳を使いながら話をするのがとても楽しくて「ラオスに来て良かったな」と思いました。１日目は家族と共に過ごし，あっという間に過ぎました。

２日目は，近所の５家族一緒に，タートソーン滝を見に行きました。私が考えていたものとは違い，湖のような所でした。昼食をとった後，水遊びをしました。少しずつラオスの人達との会話が増えてきて，お互い笑顔で接する事が出来るようになりました。でも，言葉が通じないので，指さし会話帳，ジェスチャーの大切さをすごく実感しました。みんなでたくさん話ができて，充実した１日となりました。

３日目は，青年海外協力隊の活動の視察という事で，チャナイモ浄水場と，国立母子保健病院に行きました。浄水場では水質検査を行っている方の話を聞きました。その人は，「ラオスに来たけど，設備も整っていたからあまり，必要なかったかも」と話していました。私も実際，「こんなに設備が整っている浄水場があるんだ」と思いました。私の想像していたものより，すばらしかったです。

国立母子保健病院では，看護師として働いている方に話を聞きました。その人は，「その国のやり方は変えずに，アドバイスをしてあげている。」と話していました。病院の設備はあまり整っておらず，大丈夫なのかな？と心配になりました。ラオスでは，家族が患者の世話をするのが当たり前みたいで，そこが日本と違う所だなと感じました。

４日目は，私が楽しみにしていたフアクア小学校との交流でした。お互いの国の文化の交流ができました。ソーラン節やおはら節，折り紙や書道など，いろいろな出し物をしました。小学校からの出し物はダンスが多かったのですが，ラオス人の指先の美しさに感動しました。小学校を見て私は，日本がどれだけ豊かなのか気付かされました。床は土だし，１つの机に４・５人が座っていました。教室も熱がこもっていて，熱い中で勉強を頑張っているんだなあと感心しました。この日は，ホームステイ最終日だったので，夜にバーシーというお別れの儀式がありました。食事にあひるが一匹分出てきたのには驚きました。途中で村のみんなが私達の手首に糸を巻いてお祈りをしてくれました。夜になると，みんなでダンスを踊ったり，歌をうたったり，すごく盛り上がりました。お別れなんだという寂しい思いもあったけど，楽しい夜でした。

７月24日，青年海外協力隊の活動視察で，サイセッター郡病院，バンドゥンヘルスセンターへ行きました。郡の病院は，結構設備が整っていて安心できました。ヘルスセンターは，思っていたものと全然違い驚きました。私達はこの時，実際に家に訪問して本当の姿を見ることが出来ました。貴重な体験をさせてもらいました。夜は，JICA関係者の方とご飯を囲み，たくさんの話をしました。普段ではこのような機会がないので，光栄に思いました。

25日は市内観光と買い物をしました。凱旋門に登ったり，友好橋を見たりして感動しました。買い物は，ラオスの物価の安さに驚いてばかりでした。たくさんのお土産を買いました。あっという間に時間が過ぎました。この日は本当に最後のお別れでした。ナーソーン村のみんなが空港に来てくれました。うれしい反面，寂しい気持ちでいっぱいになり泣きました。４日間のホームステイの中で，すばらしい人たちと出会い，すごく楽しい時間を過ごし，このままずっと，ラオスに居たいなあと思いました。

最後まで，涙，涙でしたが，すごく感謝の気持ちでいっぱいでした。誰にでも優しいラオス人に出会えて私はとても幸せでした。

今回私は，将来の夢である，青年海外協力隊の活動の視察も出来たし，親切で優しいラオス人とも出会えてすごく嬉しく思っています。ラオスの文化や言葉もたくさん学んだし，逆に日本の文化や言葉を教えることが出来たので，お互い異文化に触れられた良い機会だったと思います。

私は将来また，ラオスに行きたいです。そして，この事業で改めて感じた，国際協力の大切さ，文化の違いなどを，周りの人達に伝えて行けたらいいなと思います。将来私は，青年海外協力隊員になって，少しでも，いろいろな国の人達のために，サポートが出来たらいいです。今回のこの経験を生かしていきたいと思います。

ラオスから学んだこと

高隈中学校　1年　鶴丸　千草

「サバイディー」

ホストファミリーと対面し，片言のラオス語で自己紹介をしました。ラオス，２日目。午前中にJICAの事務所を訪問した後，ナーソーン村でのホームステイが始まりました。家に着くと，私が４日間を過ごす部屋へ案内してくれました。木のとびらのついた窓からは，あひるが放し飼いにされている庭がよく見えました。

ホストファミリーの方と指さし会話帳を使って，いろいろお話しをしました。でも，時には20分も30分もかけてやっと分かったり通じたりすることがあり，大変でした。けれど，やっと分かったときは，とてもうれしそうでした。そして，初めての夕食。竹でつくられた小さなたらいみたいな机に庭で飼っているあひるの肉と，もち米カオニャオをつけて食べる辛いペーストなどが出されました。小さい机なので，家族全員で食べることができず，２～３人くらいずつ，交代で食べていて，みんなでそろって食べることはないんだなぁと思いました。

次の日は，１日ずっとホストファミリーと過ごすことになっていました。私たちを受け入れてくれた７家族くらいといっしょに，滝を見に行きました。その後，別荘（？）でお昼ご飯を食べさせてもらいました。その場でつった魚がでてきたり，いろんな料理の方法がちがったりするので，とても驚きました。ラオスのいろんなところを発見できました。

とまどったり苦労したりしながらの日々はとても早く過ぎました。夜は雨がたたきつけるように降り続けました。私が使っていた部屋は，水びたしになっていて，本やスーツケースはぐっしょりぬれてしまいました。しん水なんて体験したことはなかったので，かなり大変だったけどいい体験になりました。

青年海外協力隊の活動は，ラオスの人のために，一生懸命働いている人がいることをまのあたりにして，とても感動しました。人が人のために働けるってすごいなぁと思いました。私も学校生活や家での生活の中で，他の人のために何かできたらと思います。

私はラオスで一週間過ごして，人と人とのつながり，温かさを実感しました。夜に近所の人とおしゃべりしたり，隣の人がご飯食べに来たり，村の１つが家族みたいでした。いつも夜にどこかへ行くときは，だれか１人がつきそってくれて，おなかすいていないかとか，つかれてないかとかを気にかけてくれました。ステイ先にいた，同級生の女の子はいつもご飯をつくってくれていました。空港には村のみんなで来てくれてうれしかったです。行動の１つ１つにやさしさがありました。

ラオスは，日本みたいに何でもあるわけじゃないし，水に困ることもあります。でも，みんなのんびりしてて，だれにでもやさしく接してくれます。日本とちがうところも多いけれど，全て日本がいいというわけではありません。ラオスにはラオスの，日本には日本の，いいところがたくさんあります。人を認めないで自分だけというのではなく，人も自分もどちらもいいという心が大切だと学べました。これからの生活に生かしたいです。また，大人になってからラオスへ行って，そのときにはもっとコミュニケーションをとれるようにラオス語，英語を勉強しておきたいです。たくさんの思い出と大切なことを与えてくれたラオスに感謝します。ありがとうございました。

本人：左から２番目

ラオスでの僕

薩南工業高等学校　1年　宇都真太郎

僕の参加したこの「青少年国際協力体験事業」は僕にとって初めての経験ばかりでした。

元々，海外事業に参加したことのあった僕はこの企画を知り，迷わず応募しました。面接を受け，それに受かると待っていたのは２回の研修で，初めの研修で思ったことは「大丈夫かな。」です。鹿児島中から集まった会ったこともない全く知らない人達と一週間もラオスに行くのかと思うと少なからず不安になりました。しかし，２回目の１泊２日の研修でその不安もなくなっていきました。年や学校は違っても同じ目標を持っている人達とは，すごす内にうちとけ仲良くなっていきました。楽しい時間で「これも体験事業の一部なんだ。」と感じました。

出発の日は鹿児島空港に集合でそこで結団式をするといよいよラオスに出発しました。鹿児島，福岡，タイ，ラオスと飛行機で移動しました。福岡からタイまでは４時間以上のフライトで，あれほど長い時間座席に座っていたのは初めてでした。そしてタイ空港ほど大きな建物も初めてでした。奥行きが見えないほどの大きさで，そこでは2000円をバーツに変えて自由行動をしました。日本と同じくらいの値段のハンバーガーセットを買うとコーラとポテトだけ異様に大きかったり，変ったアイスクリームを食べたりしたけど，色々な国の人がたくさんいて新鮮でした。もう１回フライトするとやっとラオスに到着。夜遅いのでバスでホテルへ。窓の外を見るとヘルメットなしで３人乗りしているバイクがありました。夜は警察がいないので良いそうです。少しみんなで盛り上がりました。２日目の朝少し散歩すると，ゴミが目立って生ゴミもあったので臭かったです。車やバイクが多くて危なかったです。午前中にはJICAを訪問しました。６割ほどの子供しか小学校を出れない教育や信頼性がなくタイに患者が行ってしまう医療など厳しい現実を聞くことが出来て，宗教や地域によっての格差という想像もしなかった問題にとても驚きました。午後はいよいよホームステイ先のナーソーン村へ行きました。バスから降りると村の人達がたくさん集まって来てくれていて，整列した子供達から花飾りの首輪のプレゼントをもらいました。自分のお世話になる家に着くとバイクの後ろに乗って市場へ。すごい数のハエや強烈なにおいがとてもリアル感を出していました。３日目には自給自足の生活をしている一軒家に行きました。その時驚いたのは15歳の人が車を運転していたことです。ものすごく不安定な道のりを見事なテクニックで進んで行くのはとてもたくましかったです。その一軒家でお昼もご馳走になりました。全て薪で料理していたのに魚やピラフなどとてもおいしかったです。牛や山羊，ガチョウをあんなに近くに感じたのも久しぶりでした。４日目は体調を崩してしまいました。朝早くでしたが同行者の方々がすぐに来てくださって心強かったです。腹痛がひどく最高38度２分の熱もありましたが，夜にはすっかりよくなってダンスを汗をかくくらい楽しみました。５日目はあいにくの雨でした。フアクア小学校との交流会で，踊りやバスケットなど色々なものを披露しましたが，僕は折り紙をしました。羽ばたく鶴を折るとみんな喜んで折り紙を取りあっているほどでうれしかったです。その日はホームステイ最後の夜で一軒の家に集まってバーシーの儀式をしました。僕達の安全を祈って手首に糸を結んでくれて鳥の丸煮込みを出してくれました。その後はみんなで踊りまくりました。みんなが帰るとお土産をもらい，何人かで話をしました。「私達は，もう家族なんだから，いつでも遊びに来て。」と言われた時は感動しました。６日目は，朝，村を出て病院へ。そこでは北村隊員にラオスの人々のたくましさを教えてもらいました。実際に診療所や赤ちゃんを見ることもできました。夜のJICA関係者との懇談会でも貴重な話を聞くことが出来ました。７日目は観光でさまざまなお土産を買いました。いよいよラオスともお別れというビエンチャン空港では，村の人達が50人近く来てくれました。たくさん写真も撮って涙のお別れでした。泣かないと決めていたのに初めてのもらい泣きをしました。それだけ良い別れだったと思います。

僕はたった４泊５日でこれだけ深い絆を作ることが出来るとは知りませんでした。またいつか，今より大きくなってラオスを訪ねたいと思います。

本人：中央

私が見たラオス

鳳凰高等学校　1年　外薗　詩織

私はこの「鹿児島県青少年国際協力体験事業」に参加して色んなことを学んだり，考えさせられました。

事前研修では，沢山のラオス語を覚えたり，歌を練習したりと辛いものばかりでした。でも，ラオスで沢山の友達を作りたかったので必死に覚えました。

体験事業初日，私は「期待」と「不安」を胸に鹿児島空港を飛び立ちました。人生初の渡航です。

約16時間後，派遣団14名はとうとうラオスに着きました。ラオスの気候は鹿児島の気候より少し暑い気がしました。

次の日からのホームステイは初体験ばっかりでした。ヘルメットを被らないでバイクに二人乗り，知り合いの家には勝手に上がり込んで普通に話していたりと今の日本では考えられない光景ばかりでした。その中でも一番驚いたのが「市場」でした。

ホームステイ初日，私はお母さんに市場へ連れて行ってもらいました。そこで見たものは日本では食べたことのないカエルやコオロギ，ハエのいっぱい集まった肉や魚と，とても不衛生な感じがしました。

また，ホームステイ先だけでなく，青年海外協力隊活動現場でも驚くことは沢山ありました。

私たちは「チャナイモ浄水場」「国立母子保健病院」「サイセッター郡病院」「バンドゥンヘルスセンター」を訪問しました。

チャナイモ浄水場では，鵜飼隊員たちが浄水場の目の前を流れる汚染されたメコン川の水からとてもきれいな水に変えて安心して飲めるように頑張っていました。しかし，やっぱり浄水場から遠い村ではきれいな水が行き届いていないそうです。

本人：右から２番目

国立母子保健病院では信じられない事を知りました。成田隊員によるとここの看護師さんたちは，免許を持っていなかったり，患者さんの所に行かないなど日本ではありえない光景でした。理由は社会主義や副業など色々と理由があるそうです。また，ラオスでは世話をするのは家族の仕事という習慣があるため，炊飯器や扇風機を病院に持ってきて家族が寝泊まりしていたのには驚きました。

そして，サイセッター郡病院も国立母子保健病院と同様に，看護師は責任感がなかったりしました。しかも，ラオスの妊婦さんたちは出産後早くて４時間経てば家に帰ったり，村の仕来りにより森で出産したり，経済的要因により病院に行かなかったりと日本よりものすごく劣っていることに驚かされました。

でも，そんな状況を少しでも改善する為に３名の隊員は自分の仕事に誇りと責任を持ち頑張っている姿に感銘を受けました。

先進国に生まれ，何不自由なく生活をしてきた中でラオスの生活が私にとって大きな影響を与えてくれました。

この経験を機に青年海外協力隊員になり少しでも途上国の人々の為に力を注ぎたいと思いました。

本当に今回の事業に参加できてよかったです。

ラオスと日本

鳳凰高等学校　1年　有木　広秋

今回のラオス派遣でホームステイや病院，浄水場を視察しました。その中で日本と違うところ，同じところがあっていろいろと驚きました。

まず病院については，看護師の患者の命への責任感が薄いことに一番驚きました。最初は，「日本に比べてなんて無責任な」と少し驚いたのですが，その後，理由を聞いて少し納得しました。

その理由は，３つあります。１つ目は，ラオスは社会主義国なので，給料は年功序列制で，勤務内容は関係ないからです。２つ目は，ラオスでは，学校さえ卒業すれば，どんな人でも医者・看護師になることができます。また，授業ではノートを書きとるだけで，実習のようなものもないそうです。

３つ目は，自分の意志で看護師になっていないということです。ラオスは病院に物理的・経済的理由で行くことができないことが，多々あります。そのため，身内に１人看護師がいると安心です。このため，両親に頼まれて看護師になるということもよくあるそうです。

次に僕たちの視察した浄水場では，仕組みが日本のものとかなり似ていました。なぜなら，物・人・経済的支援の大半を日本がしているのと，シンプルな構造で，人手がいらないからです。

その浄水場では，メコン川というとても大きな川から水を取って，飲める水にしています。ところが各家庭に供給される途中で，水道管が古くなっていたり，壊れていたりして飲めない飲み水になってしまいます。そのため，各家庭では飲み水としてでなく，風呂の水などに使われていて，飲み水は，買って手に入れるものになっていました。

本人：後列中央

最後にホームステイで感じたことは，お互いが支えあって生きているので，隣近所のつながりが強く，皆，とても優しいということです。

たった５日間程度，実質２日程度しか，接していないのに，まるで何ヶ月も一緒にいたように，別れがたかったです。

実際，タイのバンコク空港へ向かうとき，村の人のほとんどの人が見送りに来てくれました。その時に，「たった５日間ふれあっただけで，こんなにも情が通じるようになるんだ」と思いました。

今回のラオス派遣によって，ラオスと比べた日本，日本と比べたラオスの長所・短所のそれぞれを少し感じることができました。

これからは，もっと日本のことや自分の身近なことを理解していきたいです。

本人：左

ラオスでの出来事

枕崎中学校　2年　下竹　輝希

ラオスで，改めて人間のすばらしさを知ることができました。ぼくが青少年国際協力体験事業に参加しようと思ったのは中学１年生のころ，海外に行ってみたいと思ったことです。２年になってラオスというどこにあるかも知らない国を実際に行って肌で感じようと思い父と母に相談をしたら，条件付きで結果はOKでしたが，ここからが本当の苦難でした。

初めての顔合わせのとき初めて会う13人と４人の同行者とうまくやっていけるか正直不安でした。ラオスに行くのか半信半疑で事前研修を続けていくにつれてラオスに行くのかと本当に思えてきました。空港に集まり，結団式も終えて本当に行くのかとなにもかもが不安になってきました。不安は的中，ラオスについたのは，家を出てから19時間が，経っていました。もうヘトヘトでホテルについてすぐベットに入りました。

次の日JICAの事務所を訪問して話を聞きました。首都から近い学校は，２階建ての建物などが多いのに，地方の学校になるとボロボロの教室を使っていると聞きショックを受けました。ホームステイ先ではこれからお世話になるやさしそうなお母さんが待っていました。お母さんと夕食を買いにヘルメットもかぶらずバイクで２人乗りで行きました。市場に豚肉が生で置いてあったり，ナマズが生きたまま売ってあったので日本の市場と全く違い，引いてしまいました。ホームステイ先の最初の夕食です。主食はもち米で唐辛子のタレにつけて手で食べました。とてつもなく辛かったです。

次の日の朝みんなでソーラン節を練習して披露しました。終わった後，温かい拍手をもらいつかれがふっとびました。昼はみんな合流して，ラオス人も老若男女関係なく集まってみんなで昼食を食べました。やっぱり大勢で食べるご飯はおいしいなと改めて感じました。そこには日本にはあまり無い心地良い場所がありました。ぼくはこの光景を見てラオス人は日本人みたいに人が誤った所を指摘したり，差をつけたりしないんだなと思い，日本には無いやさしいさがあふれています。ラオスの人たちと言葉は通じず苦労しましたが，心は通じあえたと思います。

次の日の保健病院の話では，ラオス人の看護師は，なりたくてなっているわけではないと言う人がいるそうです。ぼくはいやでも人のためにがんばればいいのにと思いました。次の日フアクア小学校に行きましたが，思っていたより，ボロボロではありませんでした。子供たちは日本人以上に明るく，素直だったのですぐに仲よくなることができました。夜のバーシーの儀式のときに，みんなで準備をしていて積極性や協力心が，とても強いと思いました。アヒルの丸焼きを食べたり，友達もできて，とても楽しい夜になりました。

次の日の朝ホームステイ先や村のみんなとお別れするのが悲しかったです。最後の夜JICAの関係者の人たちと懇談会があって，隊員の人たちのいろいろな話を聞いて海外でがんばっている人たちが大勢いるんだなと改めて感じました。最終日ビエンチャン市内を観光をして，夜，空港で食事をしているとホームステイ先の村の人たちが見送りにきてくれました。村人の顔を見たら，涙が出てきました。あの時のことは，言葉に表すことが出来ません。ずっとこの人たちと一緒に居たい，飛行機に乗ってもまだ帰りたくないと思いました。

ラオスでの１週間の出来事と，苦労をともにした14人の仲間は，一生の宝になりました。

最後に，ホームステイ先の家族，関係者の方々，日本の家族にコープチャイ　ライライ。

本人：後列中央

ラオスは赤

松陽高等学校　2年　田畑　侑紀

「イメージカラーは赤色です。」

この事業の面接で，ラオスのイメージを聞かれて，わたしはそう答えた。わたしにとって，ラオスのイメージがなぜ赤なのかは，実際のところ自分でも分からなかった。何も，ラオスについて知らない中で，ふと思いうかんだのが赤だった。このときは，ただ何となくだった答えだが，後に自分のイメージと本物のラオスとが，一致できた。

１泊２日の，事前学習があった。まだ，自分がラオスという異国の地に行くという実感は少しもなかった。ラオス語は，難しく英語や日本語とまったく違うため，覚えるのが大変だった。ラオスでの出し物を決め，わたしは写真を出し物としてすることになった。ラオスに行くまでの間，学校や，日本らしいものを探してたくさん写真を撮った。ラオスの人達に早く見せたくて，撮影中も胸が弾んだ。

ラオスに行くにあたって，禁止されているデジタルカメラを特別に許可してもらい，愛用の，一眼レフのデジタルカメラを持参した。たくさんの人の，たくさんの笑顔を撮りたいと思った。

ラオスに着いて，最初に思ったことは汚いということだ。日本では，ゴミ箱が用意され町中にもほとんどゴミは落ちていない。ボランティアで掃除をする人がいるおかげや，きちんとした規則があるおかげで，町は綺麗だ。しかし，ラオスではゴミを平気で道幅に捨ててしまう。もちろん，それを拾う人はいない。空気も，カメラのレンズが一瞬でくもる程，汚れていた。

村に着くと，感動と驚きの連続だった。村人総勢で，温かく迎えてくれた。ラオスの人の優しさをすごく感じられた。ホームステイ先では，言葉が通じず何度も悔しい思いをした。ジェスチャーや絵で，何とか伝わったときは本当に嬉しかった。村の人たちは，みな仲が良く，みんなが家族のような感じだった。日本にはない，温かさがあった。その温かさのおかげもあり，すぐに打ち解けられた。言葉が通じ合えるわけではないけれど，たくさん笑い合った。意味もなく，笑い合った。村の人達と過ごす時間は，とてもゆっくりだった。

ラオスに来て，いろいろな体験をしたが，一番楽しくて心に残っていることは，ホームステイ先の子と，その子の通う学校に行った事だ。学校も，日本とはまったく違っていた。年など関係なく，同じ教室で同じ内容の授業を受けていた。日本では，決してありえない光景に，とても驚いた。その学校で，わたしは新しいクラスメイトとして，迎えられた。本来ならば，英語の授業なのだが，時間をいただき，わたしが日本語を教えるという授業になった。何度か，みんなで練習するうちに少しずつ言えるようになった。気持ちが伝わったとき，本当に嬉しかった。違う国の人が，自分の国に興味を持って学んでくれるということは，とても嬉しいことだ。今回の経験でラオスの人達が，日本に少しでも興味をもってくれることを願いたい。また，英語は本当に大切だなと痛感した。

ラオスという異国で，がんばっている日本人がいることを，わたしはとても誇りに思っている。何もかも違うなかで，誰かの役に立ち，感謝され，がんばっている青年海外協力隊の人達を尊敬する。わたしもいつか，やりたいことを見付け，それを仕事としたときに，異国で誰かの役にたちたい。そしてまた，ラオスのナーソーン村の家に帰りたい。

ラオスのイメージカラーをなぜ赤色だと思ったか。ラオスの人達と出会い，別れ，それを知ることが出来た。きっと，その赤はラオスの人達の温かい心の色なのだと，わたしは思う。

本人：右

ラオスで得たもの

川床中学校　3年　**崎迫　愛香**

7月19日，空港で結団式が行われ，わたしは期待と不安を抱きながら日本を出発した。福岡経由，バンコク経由でラオスへ到着した。

翌朝，目が覚めて目に入ってきたものは，メコン川だった。川の向こうには隣国のタイが見え，島国の日本ではありえない光景にとても驚いた。その後，JICA事務局への表敬訪問に行き，活動内容の説明を受けた。

その後，バスでホームステイ先へ移動した。そこには，たくさんの人々の笑顔の出迎えがあった。いよいよ，ホストファミリーとの対面となり，現地の我が家へ到着した。そこではすぐに言葉の壁にぶつかったが，ジェスチャーや指さし会話帳を使ってなんとかコミュニケーションをとることができた。

翌日，家族と近所の方にタートソーン滝を見に連れて行って頂いた。川幅がとても広くゆったりとした流れに，時間がゆっくり過ぎていくような気がした。

次の日は，青年海外協力隊の活動現場の視察だった。チャナイモ浄水場と国立母子保健病院へ行き，活動内容の説明を受けそのことの大変さを感じた。特に，国立母子保健病院では，医療技術・勤務制度・病気に対する患者・家族・病院スタッフの考え方の違いを知った。例えば，病院で働く看護師は，休息時間を長くとり，自分の体調を整え看護にあたること，自分の都合で勤務を休んだりすること等，日本では，ほとんどの病院で勤務時間が長過ぎたり，休みも自分の都合ではとれないのが普通のことだと思っていたわたしは，その話を聞いて，おどろいてしまった。だが，それが，ラオスでは，あたりまえのこととして，患者もスタッフも考えていることを現地隊員の方から教えていただいた。違っているから，まちがいではない！違いを知ってその上で現地の方と，現地の言葉を使い，活動をしている！その話に，強く感銘を受けた。ラオスだけでなくいろいろな国での医療の問題は様々だが，報道などで情報を得るだけでは分からないことがあるのだということを実感した。やはり百聞は一見にしかずだ！と思った。

視察を終えて，フアクア小学校での交流会があり，こちらで用意していた，たくさんの出し物ができて，わたしの担当のクラリネットの演奏もできてほっとした。オハラ節は現地の方々も踊りに加わってくれて，とても楽しく過ごせた。現地の小学生はダンスを披露してくれた。とてもかわいくて，目の輝きがまぶしいくらいだった。この日の夜はホストファミリーと過ごす最後の夜で，村長さんに招かれバーシーと呼ばれる無病息災を祈る儀式でファーイプークケーンという糸みたいなものを手に付けてもらった。アヒルの丸焼きも食べた。初めて食べたがとてもおいしかった。村の人がダンスを踊り始めて，一緒に踊ることになった。振り付けは分からなかったけれど教えてもらいながら楽しく踊れた。ラオスの人はリズム感もあり，表情豊かで，素敵なダンスだった。

次の日の朝，いよいよホストファミリーとお別れの時がきて，みんな涙のお別れだった。わずか数日の間で，こんなにも仲良くなれたのは，ホストファミリーの心の温かさ，豊かさ，ボランティア精神が与えてくれたものだと想う。

その後，JICA関係者との懇談会を終えて帰国の準備を整え，空港への移動時にまだまだここに居たいなぁと思いながら，見送りにきてくれた村の人達，現地隊員の顔を見ながら，いつかきっと青年海外協力隊員としてまた，この地に戻ってくると心の中で言いながら，飛行機に乗り込んだ。

帰国後，現地で撮った写真を見ながら，毎日，目標に向かって努力していこうと思いながら過ごしている。

本人：右

本人：左

不自由なき生活の私

市来農芸高等学校　2年　内山　祐紀

7月19日から一週間，私は国際協力の体験事業でラオスへ行ってきました。

この事業へ参加しようと思った理由は担任の強い薦めでした。最初は行ってみたいなという軽い気持ちで担任の先生に相談してみたところ先生は私よりはりきっていろいろ応援してくださいました。行く前まではラオスという国すら知りませんでした。しかも，どのような国で文化も何もかも私は分かっていませんでした。少しずつ興味を持ち始め，パソコンで調べてみたらラオスは，大変貧しい国であることが分かりました。カンボジアやベトナムに囲まれている赤道に近い国でした。今でもカンボジアとの国境付近では多くの地雷がうめられており，死と隣り合わせで生きている人々がいるのです。それを知った私は，自分に何かできることはないかと強く思うようになりました。

面接は無事に受かることができ，団長をはじめ，14人の中高生のみんなとラオスへ行くことが決まりました。行く前の１カ月間，自分にできることを探し考えました。ラオスの70パーセントを占めているのが農業だということを思い出しました。私は農業高校へ行っているという共通な部分があり，何か農業について教えられることがあるかもと思い担任の先生に相談してみました。

しかし，一週間という短い期間の中で何かを植えて収穫できるわけではないので何をしようかとても迷いました。ラオスは７月が雨期ということを知り，ゴーヤの種を持っていくことにしました。ゴーヤが元気に大きく育ちやすくするために専門の先生のところへ行き，知識を学びました。そしてラオスへ行く二週間前に，鹿屋で事前研修がありました。そこでは２日間みっちりラオス語の勉強をしました。ラオス語を最初見た時，「なんだ、このみみずみたいな文字は……。」と思いました。言葉を覚えるのにも，とても悪銭苦闘しました。少しずつ覚えていくうちに，楽しくなりラオスへ行くという気持ちが強くなりました。

本人：右

当日，いろんな人に見送られラオスへ旅立ちました。村へついた時，みんなが私達を笑顔で出迎えてくれとても嬉しかったです。ホームステイでの４日間は，言葉も通じ合わないのは何よりも大変でした。文化は食事も何もかも違いました。そんな中で私が一番思ったのは，今までの自分の生活の豊かさです。水を飲みたい時は，蛇口をひねればすぐ飲めるし，いつも温かい湯につかりお風呂にも入れます。しかしラオスでは直接水を飲むことはできず，お風呂も雨水をためたおけで洗いました。今までの自分の生活が当たり前だった私には最初，戸惑いを隠すことができませんでした。そして当たり前だと思っていた自分に腹が立ちました。ラオスの人達はみんな本当に優しくどんな時でも私に気を遣ってくれ，何よりもとても笑顔がすてきでした。出会いには別れが付きもので４日間のホームステイにも終わりがきました。最後，ラオスの空港にはたくさんの村の人々が来てくれてさみしくて，たくさん泣きました。私がラオスへ行って一番実感したことは，やっぱり今までの生活の豊かさだったと思います。日本で当たり前だと思っていたことでも，一歩外へ出てみると大きな違いだったことです。また，言葉が通じ合わない中でも，本当の家族のようになることができました。

他の団員みたいに将来の夢が決まっているわけではない私ですが，将来は人の役に立つ仕事がしたいと思います。私がこの事業に参加でき，無事にこうして今を迎えられているのも周りで支えてくれていた家族や友人，そして先生だと思います。人生の中でとても大きな思い出となったラオスへの国際協力事業でした。これからまた勉強してラオスへ行きたいと思います。

本人：中央

素晴らしいラオスとの出会い

樋脇中学校　1年　永田　愛夏

ラオスは私にとって初めての海外体験でした。日本を離れてみて，それぞれの違いや良さを知ることができ，貴重な体験ができた一週間でした。驚いたこともたくさんでした。7才くらいの子どもでもバイクや車を普通に運転していたことや，病院の先生や看護師の方が免許を持ってない事，ケアを家族に任せていること，また1日に3～4回冷たい水を浴びての入浴，スプーンと手を使ってする食事，道路は赤土のでこぼこ道で，はだしで生活している方もけっこういました。ごみもぽいぽい道路に捨てているので汚れていました。家でラオスのことを調べていて，あまり豊かな国でないと思っていましたが，私のステイ先の家は，とても立派な家で，テレビ，クーラー，冷蔵庫，ベッド，シャワー，けいたい電話など持っていて，日本の家みたいにリッチな家だなーと思いました。でも，後から聞いてみるとそれぞれの家庭によって色々でした。

そして，今回私が楽しみにしていたのが，凱旋門でした。本当に急な階段になっていて，少し疲れたけれど，最後まで登りきりました。すごく，きれいでちょうど眺めのよい場所で感動の景色でした。緑もすごく多くうらやましい感じがしました。凱旋門の中にはお店がたくさんあり，建物の周辺にはいつも人が多く，にぎやかなのが伝わってきました。日本というか，私の知っている鹿児島とは1つ1つが小さい所から違っていて，見るもの見るものが宝物になっていったようです。そして，私が今回1番感動したのはラオ人の，温かさでした。歓迎の時も温かく迎えいれてもらい，何に対しても気を配ってくれました。たった1人でのホームステイだったけれど，さびしさを感じなくてすみました。言葉も全くわからないので初日は本当に不安だったし，話したいこと，伝えたいことが伝えられず，イライラもしたし，困っていたら，すぐ手を差し出してきて，指さし会話帳を使って教えてもらい発音まで，ていねいに教えてもらいました。1日に，かるく30回は，使って教えてもらいました。行く前は「ペラペラ話せるようになる！」と言っていた私ですが，実際はまだまだで，目標に近づくことはできませんでした。話せなかったことや，理解できなかったことに，悔しい思いがまだ残っているので，いつかまた，ラオスに行きたいので日常会話はもちろんの事，難しい会話に挑戦し，たくさん勉強してから必ず行きます。

また，お別れの時も温かいパーティーを開いてもらい，旅立つ日の夜，家族の皆さんが皆で見送りに来て下さいました。お花を頂いたり，飛行機でお腹がすいたとき……と，私が好きになった食べ物を持たせてくれたり，とても嬉しかったです。待ち時間も，たくさん話をして家族との絆が深まったようでした。別れるのが辛くて号泣しました。短い付き合いで別れるのが，こんなに辛くなるなんて初めての体験でした。こんなに心の温かい方々に出会えて幸せです。「会いに行くから。」と約束をしたので必ず，行きます。そして，ラオスの人たちのように，誰に対しても温かく優しく接することができる人間になります‼

貴重な体験をさせて下さり，見守り支えて下さったたくさんの方々に改めて感謝しています。

本人：中央

若き薩摩の14人　ラオス同行記 '09

（財）鹿児島県国際交流協会　事務局長
団長　肥後　憲郎

はじめに

・４月以降の新型インフルエンザの世界的流行のため，当初，事業実施が懸念されたが，無事実施できたことに安堵した。空港等では団員の健康管理のため，全員マスクをしたので，周囲からは異様な光景に見えたと思うが，その一方で目印になり，はぐれる者はいなかった。

ラオス雑感

・ラオスは，日本の青年海外協力隊が初めて派遣された国であり，また，首都ビエンチャンの中心街の道路は日本の援助により整備されており，記念碑に両国の国旗が表示されていた箇所もあった。

・しかし，未だ，国全体として，道路，病院等各施設等のインフラ整備は十分ではなく，訪問したJICAラオス事務所でも，教育，保健衛生，行政能力の向上等６つの優先領域を設けて援助活動を行っていた。

・一方，コミュニティーの面では，地縁，血縁，村のネットワークがよく機能しており，ナーソン村でのホームスティでは，村人総出での歓送迎会や村人が我々にも気軽に挨拶するなど，村人の心の優しさ・豊かさが感じられ，ほっとした気持ちになった。

ホストファミリー万歳

・私達男性３人のホストファミリーでは，野菜料理や息子さんが取ってきてくれた川魚を使った食事が出され，また唐辛子等の香辛料が多く使われており，おいしく頂いた。

・水は井戸からの汲み上げ方式。若干濁っており，洗髪，水浴等には，少々抵抗感があったが後には慣れた。帰国してから入浴する際の水の使用については，贅沢感が伴い，改めて水の有り難さを実感した。

・家は高床式，壁は竹で編んだものであり，家の中は意外と涼しかった。夜は，今，日本ではめったに目にしない蚊帳を吊して寝たが，これも小学校時代以来であった。

・帰国の時，驚いたことに，ワッタイ（ビエンチャン）空港にホストファミリーの母が私たち大人の同行者３人の見送りに来てくれた。他の中高生の団員たちに，多くの家族が見送りにくるのは，ある程度予想していたことであったが……。

・ホームスティ期間中は，私自身ラオス語は勉強不足のため，会話が出来ず歯がゆい思いをしたが，団員は一人ずつホームスティし，家族と何とか会話をやり取りしているのを見てたくましく思えた。実際，毎晩，同行者全員で団員の健康状態のチェックを兼ねて家庭訪問をしたが，指差し会話帳を使ったり，手振り身振り等で家族と談笑したり，また近くの団員が遊びに来ていたりと楽しく過ごしていた。

雨の中でのフアクア小学校交流

・教室の整備は遅れ，一人ずつの机・椅子ではなく，共用の長机と長椅子を使用している状況であり，先日訪問したJICAラオス事務所で聞いたとおり，教材，教員の不足等が感じられた。

・小学校を訪問した日はあいにくの雨模様であったが，相互交流の中で，ラオスの子ども達は元気に地元の踊りを披露してくれた。また，お返しとして団員もおはら節等を踊った。この小学校の子供たちが成人になるころには，教育事情等も改善され，国全体としてより発展していることを期待したい。

奮闘・使命感に燃える青年海外協力隊

・今回，浄水場，国立母子保健病院，郡病院で３人の青年海外協力隊員に会い，活動状況を聞かせてもらったが，施設・設備不足等の状況の下，また異なった文化・習慣の中で助言・指導をすることは難しいだろうなあと感じた。

・一例として，母子保健に関してみると，出産の８割は自宅出産で，乳幼児死亡率・妊産婦死亡率が高く，文化・習慣の違い等により一部の地域では妊婦が一人で出産する場合もあると聞いた時は耳を疑った。

　また，日本と違い，看護師は，ほとんど病室の妊産婦に看護に行かないので隊員がそのことを尋ねると，産後は家族が病室に一緒に寝泊りし，妊婦の面倒を看るとのこと。これも習慣の違いによるもののようであり，やはり，まずお互いの文化・習慣の違いを理解する必要性を感じた。

・このような状況の中で，日本の技術の助言・指導を必死で伝えようと根気強く行う隊員の活動に頭の下がる思いであった。

終わりに

・各団員は視察先で積極的に隊員へ質問し，また，帰国後の県庁・市役所や協賛していただいた企業への表敬訪問・報告会の席上で，「将来青年海外協力隊員を目指したい」という数名の団員が出てきたことは非常に嬉しく頼もしく思えた。

・幕末の薩摩藩の英国留学生のように，彼ら14人の中高生が，感受性の強い時期に青年海外協力隊員の活動現場の視察，農村でのホームスティといった国際協力や異文化体験等貴重な体験をしたことにより，将来きっと鹿児島県，いな日本を担う国際性豊かな人間に成長してくれると信じてやまない。

　以上，当体験事業を振り返り無事帰国できたことに対し，現地で奮闘してくれた同行者の皆さんに感謝するとともに，当事業実施にあたり県，関係市，協賛企業等関係者の方々の御協力に対してお礼を申し上げます。

本人：左

ラオスでのすばらしい日々

青年海外協力隊ラオスOV
林田　学

深夜にラオスの首都ビエンチャンに到着し，雨季の重ったるい空気の中，バスでホテルへ向かう。途中，ノーヘル２人乗り，家族３人乗り，信号無視等のバイクに次々と追い抜かれていく。ガイドの説明によると，これらは皆交通違反だが，夜は取り締まりが無いのでだいじょうぶだと言う。なんじゃそりゃ。

翌日昼すぎにホームステイ先であるナーソーン村に到着。バスを降りた途端，小学校低学年らしい子供達を先頭に，村中の人々がこれ以上ない笑顔で出迎えてくれ，バスの中での皆のあの不安げな顔が一瞬でほころんだ笑顔に変った様子は，今でも鮮明に思い出される。

私達の村での生活を思い返してみると，濁った井戸水や雨水で水浴びや洗濯をしたこと。生きた鶏やアヒルがさばかれるところを目の当たりにした料理を，ホームステイ先の家族と同じように手でこねたもち米と一緒に食べたこと。滝へピクニックに行こうと家族に誘われ，トラックの荷台に乗ってものすごい悪路を走り，到着した家でごちそうを振舞われ，結局，滝へは立ち寄らずに帰宅したこと。

本人：右

また，村の子供も通うフアクア小学校での交流会では，日本で練習を重ねたラオス語の歌を歌い，大喝采を浴びたこと。子供達が日本から準備してきた出し物に，現地の小学生の人だかりができたこと。おはら節を現地の人もごちゃまぜになって踊ったこと，それとは逆に「テンバッサロム」というラオスのモダンダンス（？）を日本の子供達も一緒になって踊ったこと。

村での最後の夜には，バーシーという儀式で，村の人達に両手首いっぱいに木綿の糸を結んでもらい，一緒にランボンダンスを踊ったこと。村を出発する時は，別れが辛くて，家族も自分達も涙が止まらなかったこと……。

ラオスの習慣や文化を体験し，ラオス人のあたたかく，おおらかな心にふれ，おおきく成長して帰国した14人が，ラオスでのすばらしい日々を忘れること無く，まわりに伝え，今後に生かしていくことを期待します。

変化と成長

㈶鹿児島県国際交流協会
交流推進員　段原　美幸

「体験事業」を担当するようになって３年目。今回，はじめて同行者として旅立ちました。初めは誰よりも緊張していましたが，第１回事前研修で子どもたちと会い，目を輝かせて講義を聴く姿にたくさんのエネルギーをもらいました。そしていつしか緊張も解け，気合が入っていきました。

２回の事前研修の中でラオス語とラオス文化や生活様式を学び，あっという間に出発当日を迎えていました。

福岡，タイと経由し，約14時間後，首都ビエンチャンに到着しました。長時間のフライトにもかかわらず，団員一同，夜のビエンチャンの風景を眺めながら興奮気味に「バイクの二人乗りはいいの？」など，ガイドさんに次々と質問をしました。

ホームステイ先のナーソーン村は，首都からバスで45分ほどの所にありました。団員同士のステイ先が近く，みんなの様子を徒歩で把握できる距離だったのでとても安心しました。

ラオスの人々は「おもてなしの心」を深く持っており，常に私たちが気持ちよく過ごせるよう気を遣ってくださいました。ご近所同士の繋がりも濃く，村全体で一つの家族という心地よい空気が流れていました。そんな温かい家庭にステイをし，団員達は「ラオス語・指差し会話帳」を片手にコミュニケーションを取って，言葉と気持ちの交流を図っていました。最初は上手く言いたいことが伝わらずもどかしい思いをしていましたが，日増しに楽しそうに交流する姿を見て，心の変化と，成長していく団員の姿に驚かされました。

本人：後列左

本人：右

チナイモ浄水場で水質検査をしている鵜飼隊員からの活動内容を聞き，日本では考えなかった“飲める水”のありがたさを再認識しました。また，国立母子保健病院の成田隊員からの乳幼児医療に関する講義を通し，ここでもいかに私たちが恵まれているかを痛感しました。

鹿児島県出身の北村隊員が所属しているサイセッター郡病院では，新生児のいる家庭の巡回に同行させてもらい，青年海外協力隊の活動を身近に体験することができました。「将来は青年海外協力隊員になる！」など，夢を語る団員の姿に感動しました。

この７泊８日に体験したことが，全団員の将来に大きく関与することは間違いないと思います。国際協力・国際交流の現場を肌で感じ，大きく成長した14名の今後に期待をします。

ラオス体験事業同行日記

ドミニカ共和国青年海外協力隊ＯＶ
柳元　理恵

ラオス、未知の世界への幕開けだった。看護師としての同行。これまでも国際協力・交流事業に携わったが、実際その国、土地に赴き同行するのは初めてで、不安・期待の混ざった感情が出発前も、同行しながらも続いていた。

14名の中高生、初めて会ったのは７月４日、県内各地出身、これまで会ったことのない仲間との集団活動。途上国自体が初めての子ども達・団員にとっては私以上に緊張や不安が大きかったに違いないと思う。

２回目に会ったのは出発日、早朝の空港。福岡まで大揺れの機内。そして乗り換えタイへ向かう。タイの空港は新しく大きく、24時間営業、眠らない空港だった。タイで乗り換えラオス・ビエンチャンへ。ホテルに着き、１部屋のクーラーが壊れて暑い中、疲れもピークで汗をかいて団員が眠っている。想定内のハプニングではあったが、途上国に来たのだと再認する出来事で１日は締めくくられた。

翌日JICA事務所訪問。経済、教育、保健についての話を聞いた。GDP840ドル、１日当たり約2.3ドル。日本の１日当たりのGDPは10700円。数値だけでも頭やこころに響く何かがあったと思う。2005年の妊産婦死亡率は660（対10万人）、2006年の５歳未満死亡率は75（対千人）。日本ではいずれも一桁の数値も途上国においては高く驚いてしまう。事務所で聞いた「ラオスは日本を目指すわけでなく、ラオスの幸せを追求していく。」という言葉が私は印象に残った。団員の脳裏にも焼き付いたことと思う。

そしてホームステイ。その国の文化や人を知るための最高のツールだと思う。今回４泊５日。かつて社会の教科書にも登場していた高床式住居。ガスはなく薪、手動水シャワーに手動の水洗トイレ、もちろんクーラーは無い。戸惑いながらもラオス・ナーソン村の暮らしに溶け込もう、やってみようという団員の姿はたくましく、また青年海外協力隊の第１日目のようにも見えた。水・食べ物の変化への適応は難しく、団員のほとんどは体調不良となった。そのなかでも水分摂取や補食を怠らず、重症化した団員はいなかったことは幸いだったと振り返る。ホームステイ、市場。そこに暮らしがある。食べるために働く。その当たり前のことをラオスは私に思いださせてくれた。

日程を終えるころ14名は目的を成し遂げ、ひとつの仲間になっていたように思う。それぞれが多くのことを学んでこれからに活かすことは素晴らしいことだ。五感を使って得た知識や経験は一生消えないもの。私は23歳で初めて途上国に足を踏み入れた。その時の記憶や思いは消えることなく今に続き、国際協力・交流の分野に興味を持ち活動している。ラオスを訪問し人の温かさや生き方を学び、東南アジアについてもっと知りたいと思った。

弓場会長をはじめ関係者の方々、同行スタッフ、そして現職での同行者としての参加を許可し温かく送り出してくれた職場上司とスタッフに感謝します。

本人：後列右

本人：左から２番目

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1　趣　　旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し，そこの国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで，国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校，施設などでの交流を通して相互理解を深め，国際性豊かな人材を育成する。

また，派遣後は，これらの体験を報告会などを通して学校や地元に還元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2　事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県ＯＢ会
㈶鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター，鹿児島県，鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3　派 遣 先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4　派 遣 者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生，高校生，専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社，テレビ局など報道関係者
共催市町村職員

5　実施時期

７月下旬～８月上旬の間の１週間程度

派遣の前後に事前研修会，報告会なども実施

6　経　　費

この事業の実施に要する経費は，実行委員会の構成団体，協賛企業，共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国（地域）	派遣期間	人　数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第１回	マレーシア （コタキナバル，サリマンドゥ）	平成３年 3/27(水)～ 4/3(水) （７泊8日）	17名 (10)	鹿児島市，阿久根市，名瀬市， 市来町，伊集院町，祁答院町， 内之浦町，佐多町	公募
第２回	マレーシア （スブランペラ）	平成４年 3/27(金)～ 4/3(金) （７泊8日）	17名 (10)	鹿児島市，鹿屋市，大口市， 指宿市，隼人町	公募
第３回	マレーシア （クチン，テラガアイール）	平成５年 7/23(金)～ 7/30(金) （７泊8日）	17名 (10)	鹿児島市，加世田市，三島村， 隼人町，志布志町，高山町	公募
第４回	インドネシア （バンドン，パシールカリキ）	平成６年 8/ 1(月)～ 8/7(日) （６泊7日）	15名 (9)	鹿児島市，出水市，指宿市， 垂水市，菱刈町，霧島町	公募
第５回	マレーシア （コタバル）	平成７年 7/30(日)～ 8/6(日) （７泊8日）	16名 (10)	鹿児島市，国分市，頴娃町， 宮之城町，隼人町，吾平町， 根占町，中種子町	公募
第６回	マレーシア （タイピン，パリットムンントリー）	平成９年 7/27(日)～ 8/3(日) （７泊8日）	16名 (11)	鹿児島市，串木野市，東市来町， 伊集院町，郡山町，日吉町， 吹上町，金峰町	市町村 推薦
第７回	マレーシア （クチン，テラガアイール）	平成10年 7/26(日)～ 8/2(日) （７泊8日）	25名 (20)	鹿児島市，大口市，国分市，菱刈町， 姶良町，蒲生町，溝辺町，横川町， 栗野町，吉松町，牧園町，隼人町，福山町	市町村 推薦
第８回	タイ （アユタヤ，ルンカーオ）	平成11年 7/30(金)～ 8/5(木) （６泊7日）	14名 (9)	鹿児島市，指宿市，加世田市， 喜入町，笠沙町，知覧町	市町村 推薦
第９回	タイ （チェンマイ，メーカンポン）	平成12年 7/24(日)～ 7/31(月) （７泊８日）	20名 (14)	鹿児島市，鹿屋市，国分市， 垂水市，祁答院町，財部町， 末吉町，串良町	市町村 推薦
第10回	ベトナム （ホーチミン，フーホイ）	平成13年 7/20(金)～ 7/26(木) （６泊７日）	19名 (13)	鹿児島市，出水市，加世田市， 国分市，垂水市，祁答院町， 溝辺町	市町村 推薦
第11回	ベトナム （ホーチミン，タンビン）	平成14年 8/ 4(金)～8/10(木) （６泊７日）	17名 (11)	鹿児島市，串木野市，枕崎市， 国分市，垂水市，溝辺町	市町村 推薦
第12回	タイ （ナコンラチャシマー県を 予定していた）	平成15年 SARS及び鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦 予定
第13回	マレーシア （クアラルンプール， マラッカ市，トレンガヌ州）	平成16年 7/19(月)～7/26(月) （７泊８日）	13名 (9)	鹿児島市，枕崎市，国分市， 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第14回	ベトナム （ハノイ，ホアビン省， モーハイ村）	平成17年 7/24(日)～7/31(日) （７泊８日）	20名 (14)	鹿児島市，枕崎市，串木野市国際交流協会，国分市国際交流協会， 知覧町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第15回	マレーシア （クアラルンプール， マラッカ市，サバ州）	平成18年 7/22(土)～7/29(土) （７泊８日）	18名 (12)	鹿児島市，枕崎市，霧島市， 知覧町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第16回	ベトナム （ハノイ，バクザン省 バクニン省）	平成19年 7/22(日)～7/29(日) （７泊８日）	23名 (17)	鹿児島市，枕崎市教育委員会，いちき串木野市，霧島市教育委員会，南さつま国際交流推進協議会，知覧町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第17回	ラオス （ビエンチャン省 ポンミー村）	平成20年 7/20(日)～7/27(日) （７泊８日）	20名 (14)	鹿児島市，鹿屋市国際交流協会，霧島市国際交流協会，南さつま国際交流推進協議会，南九州市教育委員会，枕崎市教育委員会，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦

LAOS

＝ 編集・発行 ＝

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
〒892-0816
鹿児島県鹿児島市山下町14-50 かごしま県民交流センター1階
(財)鹿児島県国際交流協会内
TEL：099-221-6620　FAX：099-221-6643

吹き出し：松　村　祥　子
（鹿児島純心女子高等学校１年）